

Mainz 便り

顎顔面再建学講座 摂食機能再建学分野 荒 井 良 明

マインツはドイツのラインランド・プファルツの州都である。日本から飛行機で到着するフランクフルトからマイン川に沿って西に30分ほど電車で行くと、マイン川がライン川に合流する。ここにマインツがある。

マインツ大学の創立は1447年と歴史は十分古い。しかし、それでもハイデルベルグ大学に100年も負けていて悔しいなどと言う学生がいるのだから、歴史の古い国はおもしろい。

さて、マインツ大学の正式名称は、JOHANNES GUTENBERG-UNIVERSITÄT MAINZ という。マインツはグーテンベルクの生地でもあるのでこの名前がついた。グーテンベルクとは、活版印刷を発明し、世界で初めて聖書を印刷した人である。

大学の附属病院（写真1）は一般内科、外科、顎口腔歯科から成る。

この中の顎口腔歯科が日本でいうところの歯学部にあたり、さらに歯科外科、保存科、補綴科、矯正科、口腔顎顔面外科の5科に分かれる。

口腔顎顔面外科は、学内一のインテリгент集団といわれ、全員の先生が医科と歯科の両方の免許を持ち、口腔顎顔面のあらゆるオペを行う。ほ



写真1 大学附属病院の中庭

とんどの先生が医科と歯科の学位も持っている。

一方私のいる歯科外科は抜歯や歯根端切除、上顎洞手術、インプラント等の小手術を専門としており、入院ベッドは無い。

現在ドイツのすべての大学の歯科に歯科外科と顎口腔外科の2つがあるわけでは無い。ドイツ連邦は、医師免許を持つ口腔顎顔面外科に一本化を進めているようだ。現在歯周手術も歯科外科で行われているので、将来ドイツでは歯科医の免許で治療できるのは、歯だけということになってしまうのだろうか。

このような背景から、当科は口腔顎顔面外科との差別化あるいは生き残りをかけて、インプラントに全力で取り組んでいるようである。ドイツではインプラントは外科でしか植立できないからだ。

ここで、マインツ大学におけるインプラント治療の流れをみてみよう。

模型やパノラマX線等の準備後、全員の患者が歯科外科と補綴科の教授による症例検討にかけられる。症例検討は火曜日の午後に行われ、患者と2科の教授、外科の担当医の計4人で十分にディスカッションをするのである。そして治療方針が決まると、すぐに全治療費の明細を患者に渡し、オペの日程を決めることになる。その後もこの場で決まった方針に従い治療が進むことになる。

患者のデータはこの症例検討の日付で保存されているので、予後調査などをする際は、すべての患者について簡単に情報を取り出すことができる。

インプラント治療は、現在世界的な流れではあるが、とにかく審美的形態の回復にとことんこだわる。歯肉の対称性や歯間乳頭の高さを整える。そのため植立部位は骨形態に左右されるのではなく、審美的、形態的に理想的な部位ということに

なる。従って、多くの症例で骨と軟組織の回復を必要とし、骨移植と結合組織移植が併用される。

それにもかかわらず、オペは極めて短時間に効率よく消化されていくから驚きである。ソケットリフトを併用しても30分で終了してしまうのである。

歯周組織の回復のための暫間冠なども、外科医が装着し、調整まで行う。外科医といっても十分な補綴的な目も持っているのである。その後の最終補綴のみが補綴科に残された仕事である。

ところで、ドイツ人の物に対する選び方は非常に客観的であり、このことがインプラントシステムの選択にも現れているのではないだろうか？

例えば本屋の雑誌コーナーには、商品のテスト記事を掲載した雑誌がいくつもあり、中には家の壁の比較記事などもある。どの壁が一番湿気を防いで温かいかなど、詳細なデータが載っているのである。

これと同じように、ドイツでのインプラントの臨床研究には、5大学以上協同で、植立2000本以上、8年以上の予後の結果というのを頻繁に見かける。このような研究から、誰がやっても成功し、長期に安定するシステムをドイツ人が常に求めているということが理解できるであろう。

このことは、常に最新のインプラントシステムにすぐに飛びつく日本人との大きな違いだろうか。



写真2 歯科外科の講義風景

ここで、ドイツの歯科教育の一端をご紹介したい。外科の講義は、患者が中心である。講義系のドクターが適当な患者数名を探し、講義に出てもらうようお願いする。ほとんどの患者さんは了解してくれる。講義係は、教育するすべての分野の患者を探さねばならず大変である。どんな患者が用意されているのか教授は前日に尋ね、その疾患の説明の準備をする。大講堂で当日担当になった学生は、アナムネ、所見、診断とプレゼンテーションする。これが常にうまいので驚いてしまう（写真2）。そして患者に帰ってもらった後、教授がその病態の一般的な説明を始めるのである。

また、先日初めて国家試験を目撃したので、紹介したい。もちろん実技である。国家試験の抜歯は、まず患者探しが大変だ。絶対来てもらわないと困るし、できるだけ抜き易い歯を学生は探すようである。試験はアナムネと所見、診断後、伝麻し、抜歯する。これが1人1人教授の前でやるから大変である。このへんは、手の仕事を大事にするマイスターの国ドイツといったところである。

ドイツ語の外科 Chirurgie はギリシャ語の「cheir-ourgia」[手]の「仕事」に由来するという。そのためか、結局手を動かさなければ意味が無いと、このような環境の中で、毎日手の訓練という貴重な体験をさせていただいているのである。



写真3 カーニバルの山車（抜歯をするシュレーダ一首相？）歯には“平和主義”の文字が…